



説教要旨「イザヤの告げし救い主」

イザヤ書 11章 1～10節

イザヤ書 11章には救い主の誕生の預言が告げられています。イザヤは紀元前7-8世紀の預言者です。ですからイザヤの預言からイエス様の誕生まで、実に7百年もの間、イスラエルの民は救い主を待ち続けたのです。また、キリスト者たちは、十字架に架かり復活されたイエス様が天に昇られて以来、2千年にわたってイエス様が再び来られる日を待ち続けてきました。2千年以上来られていないのだから、来られるのはまだまだ先の話だろうと、つつい気を抜いてしまいそうになるのですけれども、このイザヤの預言はそのようなわたしたちに、「本当にそのままで大丈夫か？」と問いかけてきます。

イスラエルの民が求めていた救い主。それは、知恵があって、判断力があって、思慮深く、勇気がある。それら全てを兼ね備えていたならば、理想的な指導者です。是非そういう人に総理大臣を努めてほしいなと思ったりもします。けれどもイザヤ書には、そうしたことよりも重要なことがあると記されています。「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊。彼は主を畏れ敬う霊に満たされる」(11章2～3節)

これは、その全部の霊を兼ね備えているということではなくて、知恵と識別ではなくて、思慮と勇気でもなくて、彼は主を知り、畏れ敬う霊に満たされるのです。それがもっとも重要なんです。たとえ知恵がなくて、判断力も鈍くて、思慮が浅く、勇気もなかったとしても、主を知り畏れ敬うものこそがわたしたちを救うのだとイザヤは告げています。

ウクライナを初め、各地で戦争が続いています。よわい者が強い者にとことん食い物にされる現実をわたしたちは知っています。しかし、イエス・キリストが再び来られる日、救いが完成するその時、この世界は一変します。「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる」のです。

(2022・12・18 説教者：稲垣真実)